
バカとテストと召喚獣～僕の家族は幽霊！？～

松竹梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣〜僕の家族は幽霊！？〜

【Nコード】

N3171Z

【作者名】

松竹梅

【あらすじ】

これは、ある幽霊の少女とひとりの少年の物語。バカテストの第二作です。楽しく読んでいって下さい

プロローグ（前書き）

こんにちは、松竹梅です

バカテスの二作目になりますが、

楽しく読んでいって下さい

ブローグ

いつも…

いつも私はひとりぼっち…

誰にも気づかれることもなく時間が過ぎていく…

春がきて、夏がきて、秋がきて、冬がきて…

季節が永遠に続いていく…

時々、私に気づいてくれる人もいた…

だけど…

だけど、ある人はそれきり学校に来なくなつた…

噂ではそのまま転校したみたい…

また、ある人は狂ったかのように逃げていった…

噂ではそのまま隔離病院に入ったみたい…

私はひとりぼっち…

わたしは…

いやだ…

いやだいやだ…

いやだイヤだ嫌だいやだ嫌だいやだIYADAIヤだi y a d a 嫌
だイヤダイヤダイやだ嫌だIYADAIヤダイヤだ嫌だいやだイヤ
だ嫌だいやだ嫌だいやだIYADAIヤだi y a d a 嫌だイヤダイ

ヤダいやだ嫌だIYADAIヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだ
嫌だいやだIYADAIヤだiya da嫌だイヤダイヤダいやだ
嫌だIYADAIヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだ嫌だいや
だIYADAIヤだiyada嫌だイヤダイヤダいやだ嫌だIYAD
DAイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだ嫌だIYAD
AIヤだiyada嫌だイヤダイヤダいやだ嫌だIYADAIヤダ
イヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだ嫌だいやだIYADAIヤだi
yada嫌だイヤダイヤダいやだ嫌だIYADAIヤダイヤだ嫌だ
いやだイヤだ嫌だいやだ嫌だいやだIYADAIヤだiya da嫌
だイヤダイヤダいやだ嫌だIYADAIヤダイヤだ嫌だいやだイヤ
だ嫌だいやだ嫌だいやだIYADAIヤだiyada嫌だイヤダイ
ヤダいやだ嫌だIYADAIヤダイヤだ嫌だ！

もう…

もう、ひとりはイヤ！

誰か…

誰か気づいて！

私は…

私は此処にいるのに……

「ねえ、キミ、そんなところで何しているの？」

《え？》

《わ、私が見えるの？》

「なに言ってるのさ。此処にはキミしかいないじゃないか」

ああ、私の正体を知らないのね…

《私はね、幽霊なんだよ？》

「ははは、冗談はやめてよ」

《ほら、これを見て》

「え?.....」

ほら、私が壁をすり抜けたところを見せたら固まっちゃった...

この後は、いつものように逃げていくんだろうな...

そして...

そして、私はまた...

また...

ひとりぼっちになるのね...

「.....す...」

「すい〜い〜い〜」

《え？》

「すごいよ！僕、幽霊見るの初めてだよ！」

《お、驚かないの？》

「なにが？」

《私、幽霊だよ？》

「幽霊だからどうしたの？」

《え？》

私はさっきから驚いてばかりである

「そつだ！」

「ねえ、僕とお友達にならない？」

《！？》

今この子はなんて言った？

お友達？

私と？

《お、お友達になってくれるの？》

「うん 僕は吉井^{よし} 明久^{あきひさ}って言うんだ」

「キミの名前は？」

私？

私の、名前…

《わからない…》

「え？」

《私、自分が誰なのかは分からないの…》

本当…

私は何者なんだろう…

「んっ、そうだ！僕が名前を付けてあげるよ」

《え？》

「そっだな……………吉井^{よし} 幽乃^{ゆうの}、なんてどうかかな？」

《吉井……………幽乃……………》

私の…

私の名前…

《ふえっ、》

「え？」

《うええ~~~~~ん!!》

「え!?!なんで泣き出すの!そんなに気に入らなかった?」

《ち、違っの》

「?」

《わ、私、ずっと……ずっと、ひとりぼっちだったの……》

「……………」

《私を見た人は、みんな……みんな逃げていった。

中には仲良くしてくれた人もいたけど……結局はみんな私のことを忘れていった……》

「……………」

《ひとりじゃないと思うと……私……私、うれしくて……》

ギュウッ

《!?!》

「大丈夫……今度から僕がキミの家族になってあげるから」

《……家族……》

「だから、今はおもいかつきり泣いていいよ?」

《……明久》

「なに?」

《明久……あ、き久……あきひ……う、ふえ、うええ~~~~~ん》

こうして、私に新しい家族が出来ました

プロローグ（後書き）

次はいよいよ本編です

くキャラ紹介？

名前：吉井 幽乃

性別：女

種族：幽霊

身長：推定160cm

体重：幽霊だからありません

容姿：幽霊なので肌は青白いが、黒髪をおかっぱ頭にし、瞳の色は黒い

好きなもの（こと）：明久・友達・ぬいぐるみ

嫌いなもの（こと）：明久と友達をいじめ、傷つける人（島田＋F F F団）・塩

服装：基本的にセーラー服姿（明久達が調べたところ昔の旧校舎の制服であることが判明）だが

時々どうやっているのか、ナース服や巫女服を着ることがある

備考：明久が一年のときに旧校舎の屋上で会い、名前を付けてそのまま家族になる

いつもぬいぐるみに憑いており、周りには最新型のぬいぐるみ型口

ボットと言って誤魔化している

幽乃の正体に気付いているのは明久、瑞希、翔子、西村教諭、学園長だけである

くキャラ紹介? (後書き)

次からはいよいよ本編です

では、お楽しみに

第一話（前書き）

お気づきの人もいると思いますが、

幽乃のセリフは《》で書いていきます。

第一話

《……………懐かしい夢だな……………》

朝日が射し込むリビングで私は目を覚ました。

《明久を起こさなきゃ……………》

私は飛びながら明久の寝室に向かった。
なぜ、飛べるかって？

私、吉井 幽乃は幽霊だからだよ。
ん？幽霊なのに寝るのはおかしい？
余計なお世話だね

《明久く朝だよ》

寝室の壁をすり抜けて、明久の体を揺すった。
なんで明久に触れるかというと、どうやら明久は靈感が強く、触れることも出来るんだそうだ。
これは学園長から聞いたんだけど……………なんでそんなこと知ってるんだろ？

「ん、幽乃？」

《おはよう明久、もう朝だよ？》

「そうだね、なら、着替えるから出てくれる？」

《わかった》

私が部屋の外に出て、少し経つと明久が制服姿で現れた。そして、朝食をすませると明久は学校へ行く準備をした。

「じゃあ、幽乃？」

《分かったよ》

私は明久が持っているデイベアの中に入った。

実は私、学校では最新型のロボットってことになってるんだ。

他にもぬいぐるみがあるけど、一番のお気に入りは白猫のぬいぐるみかな？

だって、明久からの最初のプレゼントだもん

「それじゃあ行こうか？」

《うん》

こうして、私たちは学校に向かった。

「おはようございます。鉄じ……西村先生」

《おはようございます。西村先生》

「おはよう吉井兄妹。それと吉井兄、今、鉄人と言わなかったか？」

「ははっ、気のせいですよ」

「ん？そうか」

この肌が黒く筋骨隆々の人は、補習担当の西村 宗一先生だ。

私が気に入っている先生の1人なんだ。

だって、私の正体を知っても逃げたりしないで変わらずに接してくれるんだから。

ちなみに鉄人っていうのは、西村先生のあだ名でトライアスロンが趣味ってところからついたみたい。

あと、なんで兄妹かというと、周りからは最近できたロボット＋女の子＝妹っていう式が出来ているみたい。

「ほら、クラス分けのだ」

そう言うとき西村先生は明久に封筒を渡した。

「何処なのか分かっていますけどね」

「しかし、一年の後半から成績が上がり始めて、一年の終わりにはAクラスも取れるところにまでできていたのに残念だったな」

《気にしないで下さい。 あれは、明久が決めたことなんですから》

「そうか、まあ、頑張るように」

「《はい！》」

私と明久は返事をして教室に向かった。

向かっている最中に明久は封筒を破いて中の紙を取り出して見た。

吉井 明久 Fクラス

今年も楽しくなりそうだな

第二話

「ねえ、時間まだあるから、Aクラスでも見ていこう」

《うん、いいよ》

H Rが始まる前に私と明久はAクラスに向かった。

「すごいね……」

Aクラスを見た明久の言葉に私は頷いた。

まあ、私は何度も見てるけどね。

でも、流石にこれはやりすぎじゃないかな？

何処かの高級ホテルを思わせる装飾ばかりだよ。

あ、Aクラスに入った子が気絶しちゃった。

「AクラスがこれだとFクラスはどんなだろうね」

《さ、さあ………》

言えない……Fクラスの教室は知ってるけど言えない！

「うん、帰ろう」

《明久！帰っちゃダメだよ》

「いやだ！こんなオンボロ小屋が教室なわけがない！はっ！そうか、これは夢だ。夢なんだ！」

《明久！現実逃避しないで！》

「……なに漫才やってるんだ？」

《あ、雄二くん！》

話しかけてきたのは、明久の親友（明久は悪友って言うてたな）の坂本 雄二くんです。

「雄二、おはよう」

「それでどうしたんだ？」

《あまりの教室のひどさに明久が現実逃避してたんだよ…》

「確かにひどいな……」

雄二くんも苦笑してたよ。

今度、カヲルさんに言ってみよ。

カヲルさん、学園長だからね。

「皆さん、おはようございます。このクラスの担任になる、福原慎です。」

時間は経ち、HRが始まりました。

「それでは廊下側の人からは自己紹介をして下さい」

「木下 秀吉じゃ。演劇部に入っておる」

あ、秀吉くん。

とても、綺麗な顔立ちです
女の子みたいですネ。

え？女の子じゃないのかって？
だって……

「言っておくが、ワシは男じゃ！」

そう男の子なんですよね。

「……………土屋 康太」

つぎは康太くんです。

割と去年のクラスメイトがたくさんいますね。

「~~~~です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です。あつ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので、趣味は……」

あれ？女の子もいたんですね。
誰なんで、

「吉井明久を殴ることです」

……要注意です。

明久の友達の中で要注意人物の島田 美波さんです。
明久に暴力を振るうこと数々、何度か驚かして（幽霊的な意味で）
やりましたが、
まだ懲りてないみたいです……
ほら、明久が震え出しました。

「え」

明久の番ですね

「吉井 明久です。気軽に『ダーリン』と呼んでください」

ち、ちよつと／／／

いきなりなにを言い出すの！？／／／

『『ダーリーリイーン！！』』

……………気持ち悪いです。

明久も気持ち悪いのか顔色が青くなってますね。

よし、ここは

《次は私だよ》

私が空気をかえよう！

《ロボットの吉井 幽乃です。学生じゃありませんが仲良くして下さい。気軽に『ユノちゃん』って呼んでね》

『『ユノちゃん！！』』

《はい》

『『かあゝわいゝゝい！』』

さっきよりは空気が和みましたね。

「ありがとう幽乃」

《大丈夫だよ。だ、ダーリン／＼／／》

きや、言っちゃった

ガラッ！！

「す、すみ、ません。遅れ、てしま、いました」

『『『『え？』』』』

いきなり教室に女の子が入ってきました。
あれって……

《瑞希？》

そこには私の親友、姫路 瑞希さんがいました。

第三話

なんで瑞希がいるんでしょうか？

Aクラスほどの実力があるのに？

あ、確か体調を崩して途中退席したんでした。

明久もその付き添いで途中退席になり、無得点扱いでFクラスになったんでしたね。

私はその事を帰ってきた明久から聞きました。

「こ、今年一年よりよ………よろしくお願いします／＼／」

噛みましたね…

真っ赤になりながら瑞希がこっちに来ました。

「緊張しました」

「瑞希ちゃ」

「姫」

《みづき》

？二人も瑞希に話しかけようとしたような、気のせいですね

「え？幽乃ちゃん？」

「おはよう、瑞希ちゃん」

「あ、明久くん！／＼／」

あらあら今頃、気付いたんだ。

「明久がブサイクですまん」

「そ、そんな！えっ」と……」

「代表の坂本 雄二だ」

「あ、よろしくお願いし……それより！明久くんはブサイクじゃありません！目もパッチリしてて顔のラインも細くて綺麗だし……そのむしろ……」

そうそう明久は顔は整ってる方だね。

それより瑞希？今近くに明久がいること忘れてない？

「まあ、悪くはないな。……そういや興味がある奴もいたな」

「え？誰？」

「そ、それって誰ですか！？」

瑞希がすごい慌てようだよ。

「確か……久保……」

久保さんですか？

でも、この学年にいる久保って……

「……利光だったかな」

……新情報です。

これは警戒しないといけませんね…

今、言われたことに明久がショックを受けていますよ。

バンバン

「はいはい、その人たち静かに」

バキッ！

ガラガラ！

「」「」……「」「」

……ひどいです。

先生も軽く叩いたんでしょう。

いきなりのにみんな固まってしまいました。

「えゝ替えを用意してきますので、自習をしててください」

先生が教室を出て行ってしまいました。

「雄二、ちょっといい？」

「あ？どうした？」

「此処じゃなんだから廊下で」

明久と雄二くんもこっそりと廊下に行ってしまいました。

「えー坂本君、クラス代表の君が最後です。前に出てきてください」

あの後も自己紹介は続いていき、雄二くんが最後です。

「了解」

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

「さて、皆に一つ聞きたい」

そう言うと雄二くんは教室に視線を移していきます。
みんなの視線も自然とそれを追っていますね。

すき間風が通る教室。

古く、うす汚れた座布団。

汚れて脚もガタガタな卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい

が……」

「……不満はないか？」

『『『大有りじゃあッ！！！！』』』

魂からの叫びですね。

「だろう？俺だってこの現状に不満を抱いている」

『いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！』

『Aクラスだって同じ学費だろ！？』

『改善を要求する！！』

「そこで代表としての提案だが、FクラスはAクラスに対し試験召喚戦争を仕掛けようと思う！」

こんな早い試験召喚戦争は私が観てきた中では初めてですね。

第三話（後書き）

次回は勝てる要素を発表します。

明久の成績が！？

第四話

『そんなの勝てるわけがない』

『これ以上、設備が落ちたらどうするんだ』

『姫路さんがいたら何もいらなない』

みんなから反対の声があがってるけど、最後の関係ないよね？

「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

『無理に決まってる』

『何を根拠にそんなことを…』

「根拠ならあるさ。このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

雄二くんが自信有りげにそう答えました

「それを今から証明してやる！」

「おい康太、いつまで姫路のスカートを覗いているんだ。ちょっと前に来い」

「……………！」

康太くんは素早く立ち上がり、首を横に振っています。

けど、頬に畳の跡が残っていますよ？

「はわっ／＼／」

瑞希は素早くスカートを押さえましたが、遅いですよ。

「土屋康太 こいつがあ有名な寡黙なる性職者だ！」
ムッリーニ

そういつと康太くんはさつきよりも早く首を横に振ってます。

『馬鹿な………奴がそうだというのか！？』

『だが見る！まだ証拠を隠そうとしているぞ』

『ああ、あれこそムツツリの名に恥じない姿だ』

確かに康太くんにはムツツリーニなんて二つ名がありましたね。
瑞希が首を傾げています。

純粹なんです。

そのままです。

「それに姫路の事は皆もその実力をよく知っているはずだ」

「え？私ですか？」

そつなのです。

瑞希は学年トップ10にはいるほどの実力があるのです。

「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

『そうだ！俺達には姫路さんがいる！』

『彼女ならAクラスにも引けをとらないぞ！』

「それに木下秀吉だっている」

「ワシもか？」

『演劇部のホープ』

『確かAクラスに姉が……』

「そのほかにも島田もいる」

「えっ、ウチ？」

「島田は数学だけならAクラスにも匹敵するだけの实力がある」

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本って小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだろ』

『確かになんかやれそうな気がしてきたぞ！』

『これはいけるんじゃないか！？』

すごいです！

今、教室の士気が高まっていますよ！

「それに吉井 明久だっている」

明久も出ましたよ！

これなら士気が最高潮に達しますよ！

シーン

あれ？

『誰だ、吉井 明久って？』

『あれだろ？人形、持ち歩いてる可哀想な変態』

『あいつか…』

「ちょっと、可哀想な変態ってなに！？それに雄二！なんでそこで僕の名前を出すのさ！さっきまでの士気を返して！」

「そうか、お前たちは知らないんだな」

「こいつの肩書きは『観察処分者』だ！！」

雄二くんはそう言いきったけど、それは……

『観察処分者って馬鹿の代名詞じゃなかったか？』

そうなんです…

「ち、違うよ！ちよっとお茶目な16歳の愛称なんだよ！」

明久は慌てて否定してますが、

「そつだ、馬鹿の代名詞だ！」

「肯定するなバカ雄二！」

「あのそれってどういうものなんですか？」

瑞希が雄二くんに尋ねました。

「観察処分者っていうのは具体的には教師の雑用係だな。主に力仕事とかの雑用を物に触れるようになった召喚獣でこなすんだ」

「それって凄いですね！」

瑞希が目キラキラさせながら明久を見る

「だが、デメリットもある。

召喚獣が受けた痛みや負担の何割かはフィードバックされて本人にもくる」

『……それならおいそれと召喚できないヤツがいるって事になるじゃないか？』

「そつだが、気にするな！明久はいてもいなくても大して変わらん雑魚だ」

雑魚と言い切りましたね雄二くん。

《明久は雑魚じゃないもん!》

「ゆ、幽乃?」

私がいきなり喋ったことに明久は驚いてしまいました。が、気にしません。

《明久はこのなかで瑞希の次に頭が良いんだぞ!》

「はあ? おいおい吉井妹、バカな明久が姫路の次に頭が良いわけないだろ?」

「あの坂本くん? 本当に明久くんは頭が良いですよ?」

「? どういうことだ姫路?」

「だって、私と翔子ちゃんが手取り足取り教えたんですから」

あ、瑞希、それは……

『総員狙え!!』

いきなり皆さんカッターを構えましたよ!

「ええ! なんでカッターを構えてるの!」

『黙れ！異端者が！血祭りにあげてやる！』

『女子二人と楽しく勉強会だと！』

『しかも、手取り足取り腰取り教えてもらったと！』

『……………許せん！』

『『『『『覚悟しろ！！』』』』』

大変です！

皆さん怒っています！

といいますか、なかに不穏当なものもありましたが…

「皆さん落ち着いてください！」

「そうじゃぞ！」

瑞希と秀吉くんが明久の前に立ちました。

『ちくしょう！女子二人に守られやがって！』

『くそ、今回だけは勘弁してやる…』

「ワシは男じゃぞ…！」

秀吉くんも苦勞してますね…

「まあ、いろいろあったが…、とにかくだ！俺達の力の証明として、まずDクラスを制圧しようと思う」

雄二くんが仕切り直してますね。

「みんな、この境遇に大いに不満だろう？」

『『『当然だ！！』『』『』』

「なら全員、筆をとれ！出陣の準備だ！」

『『『『『おお~~~~~！』『』『』『』』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『『『『『打倒Aクラス！』『』『』『』『』』

こうして、第一次試験召喚戦争が始まりました。

第五話（前書き）

Dクラス戦前の作戦会議を省きます。

いよいよDクラス戦です！

ノッポガキさん、感想ありがとうございます！

第五話

『うおお~~~~~!』

只今、Dクラス戦が始まっています。

あのあと、雄二くんが明久に宣戦布告に行かせようとしたが、私と瑞希の説得により須川くんが逝きました。

実際には私と瑞希が宣戦布告に行くと言いました。え？脅迫？違いますよ

そのあと午後になり戦争は始まりました。

「……そろそろだな」

？なにがでしょうか？

ちなみに私は教室にいます。

明久と瑞希は回復試験に行っていました。

私って、生徒じゃないので召喚獣出せないんです。

………そもそも幽霊の私が召喚、出来るんでしょうか？

《雄二くん、そろそろってなに？》

「島田の部隊が臆病風に吹かれて後退し始めてるはずだ」

《え！？どうするの？》

「こつするさ………おい！誰かこのメモを島田の部隊まで行って、読み上げてくれ！」

そう雄二くんが言うひとりみの生徒がそれを持って、教室から出て

行きました。

《雄二くん、なにを書いたんですか？》

「まあ、大人しく聞いてみるよ」

雄二くんがそう言いましたので、聞き耳を立てていますと…

『そ、総員突撃よ！』

島田さんの叫び声が聞こえました。

一体、なにが書いてあったんでしょうか？

『坂本！』

「ん？どうしたんだ？」

『島田からの伝言で先生方に偽情報を流して欲しいそうだ！』

「……………Dクラスはどの先生を呼んでるんだ？」

『確か……………船越先生だったはずだが？』

「そうか…」

雄二くん？

嫌な笑みを浮かべてますよ？

「よし、明久が体育館裏で待っていると校内放送で伝えてくれ」

な、なんですって！

ふ、船越先生といえは…

婚期を逃してしまい、単位を盾にして生徒にまで手を出そうとする
恐ろしい先生ですよ…

《雄二くん、そんなことしないよね？》

「これは作戦に必要なことなんだ」

《雄二くん…》

「いや、だからな…」

《……………（；・；）》

「……………予定変更だ。明久ではなく偽名を使ってくれ。あの先生なら偽名と知っても行くはずだ」

『ああ、分かった！』

そうして、その生徒は放送室に向かって行きました。

雄二くん、ありがとうございます

ピンポンパンポン！

『連絡いたします。船越先生、船越先生。Fクラスの文月左門くんが体育館裏で待っています。生徒と先生の垣根を越えた話がしたいそうです』

放送の後、戦場の方からにわかに騒ぎ出しました。

『ちよつと！船越先生、何処に行くんですか！』

『今は戦争中ですよ！』

『あれは明らかに偽名ですよ！』

『ええい！放しなさい！若いあなた達には分からないのよ！！待ってなさい左門くん！！！！』

『あ！船越先生！！！！』

…………… 本当に明久じゃなくて良かったです……………

そのあと雄二くん達の本隊も向かい、しばらく経った頃……

『戦争終了！勝者、Fクラス！』

という声が響きました。

でも、私ひとり教室に残されて寂しいです…

第六話

《あっきひさ》

「わっ！？と、どうしたの幽乃？」

Dクラス戦の戦後対談を終えた明久達が帰ってきたので、私は明久に飛びつきました

《ひどいよ明久、私だけ置いていくなんて》

「あはは、ごめんね。でも、次の戦争の時も教室で待っててね」

《そんな》

「帰ったら、いっぱい遊んであげるからね」

《ぶっ、分かった…》

ひとりで待ってるのは寂しいけど…
明久が遊んでくれるんならいいか

《それじゃあ、帰ろう？》

「うん、そうだね」

「あ！」

《どうしたの？》

正面玄関まで来ると明久が驚いた声をあげました。
どうしたんでしょうか？

「教室に筆記用具を忘れたみたい」

《もしようがないな明久わ》

再び私達は教室に入りましたが、

《あれ？瑞希？》

なんと瑞希が残っていました。

「あ、あ、明久くんにゆ、幽乃ちゃん。ど、ど、ど、どうしたんですか？」

「……………何か知りませんが、すごい慌てようです。
おや？卓袱台の上に何かありますね。
あれは、手紙でしょうか？」

「どうしたの瑞希ちゃん、そんなに慌てて？」

「な、なんにもありません…」

ドタッ

「あう」

瑞希が慌てて立ち上がったところ、卓袱台にぶつかり転んでしまいました。

大丈夫でしょうか？

「ん？なにこれ？」

明久の足元に瑞希の手紙？がきましたね。
なんて書いてあるんでしょう？

『あなたが好きです』

……

《明久》

「？なに、幽乃」

《その手紙、私に貸して？》

「いいよ、はい」

《ありがとう。あと、瑞希と話があるから正面玄関で待っていてくれる？》

「わかったよ」

《ちなみに……》

「？」

《手紙の内容って見ましたか？》

「……………見てないよ」

嘘ですね。

明らかに目が泳いでいますよ？

あ、出て行ってしまいました。

さて…

《瑞希》

「ゆ、幽乃ちゃん」

《はい、これ》

私は手紙を渡しました。

「……………幽乃ちゃん」

《？なに》

「明久くんはこの手紙を見ちゃいましたか？」

《……………たぶん、見たと思うよ》

「！」

瑞希は驚いた後、目に涙が溜まり始めました。

「こんな形で見られたくありませんでした……」

《瑞希……どうせ明久のことだから、瑞希が他の人に宛てた手紙だ
と思ってるよ…》

「……………そうですね。明久くんですもんね……」

二人そろって溜息が出てしまいました。

《瑞希、去年に私が言ったこと覚えてる？》

《私は瑞希の恋を応援するって》

《私達は親友なんだからって》

「覚えていますよ」

瑞希がさっきまでの泣き顔からきれいな笑顔に戻りました。

《明久は鈍感だけど、頑張ろうね》

「はい」

私と瑞希は握手をして笑っていました。

《おまたせ》

あのと、瑞希と別れて急いで明久の元に向かいました。

「瑞希ちゃんと、なにを話してたの？」

《女の子同士の秘密の会話だよ それより明久、早く帰ろう？》

「分かったよ」

私たちは仲良く帰宅しました。

第七話（前書き）

ノッポガキさん、感想ありがとうございます！

いよいよ姫路の弁当が明らかに！

第七話

キンコーンカーンコーン

四時間目の終了のチャイムが鳴りました。

鳴ったと同時にほとんどの人が卓袱台に突っ伏してしまいました。
今日は昨日の戦争の回復試験をしています。
生徒じゃない私は結構、暇でしたね…

「よし、昼飯を食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

雄二くん、流石に食い過ぎじゃない？

「あの、皆さん」

「ん？どうしたんじゃ、姫路よ？」

「お弁当を作ってきたんですけど一緒に食べませんか？」

「え？いいのウチ達まで？」

「はい、ちょっと多く作りすぎてしまつて」

そついつて瑞希はお弁当を取り出したんだけど……
なんで重箱？

「せっかくのご馳走じゃし、教室ではなく屋上にも行くかの？」

「そうだな、だったらお前ら先に行つててくれ」

《雄二くん、用事でもあるの?》

「違う違う、飲み物を買ってくるだけだ」

「なら、ウチも行くわ。一人じゃ持ちきれないでしょ?」

そういつて二人は教室をあとにしました。

「それじゃあ行こう。瑞希ちゃん、お弁当は僕が持つよ」

「ありがとうございます。明久くん」

うんうん、仲が良いね

そのあと、明久達と屋上に行つて、しばらくして雄二くん達も来ました。

「はい、食べてみてください」

「「「「おお!」「」「」」

みんな驚きの声をあげました。

当然ですね。

なんたつて、そこには色とりどりのおかずがあつて、ご飯なんかパエリアなんだから。

「これはおいしそうじゃの」

「すごいわね、瑞希」

「……………美味そう」

「よくこれだけの量を作ったな」

「はい、朝の四時半から作りましたから」

「早過ぎじゃない!？」

流石に早く起きすぎだよ、瑞希…

「こんなに美味しくなるなんて霧島さんに感謝だね」

「?なんでそこで翔子の名前が出るんだ？」

「瑞希ちゃん、前まで料理に薬品を平気で混ぜる人だったんだよ？」

ビキッ

あっ、みんな固まりましたね。

おっ、今度は箸を置いて下がり始めました。

「た、食べても大丈夫なんだろうな？」

「なに言ってるのさ雄二。今、食べたばかりじゃない」

「でもよ…」

《それに言っただじゃん、翔子のおかげだって》

《去年、明久と翔子が瑞希に一から料理を教えたんだよ》

「え？吉井も料理出来るの？」

「明久は一人暮らしだからな。今はロボットがいるが、家事全般はこなせるぞ」

「けど、あの時は大変だったな……」

《そうだね……いくら注意しても目を離した隙にすぐに薬品を入れようとするんだもん。止める方は気が気じゃなかったよ……》

「去年あいつが時々、疲れた顔をしてた意味がようやく分かったよ……」

そうなんだよね……

味見を瑞希がしないのもあって、翔子が倒れたときは本当に焦ったよ……

「ところで雄二よ」

「なんだ秀吉？」

「霧島とは仲がいいのかの？」

「ああ、あいつとは幼なじみだ」

まずいです。

ヒュッ！

ダスッ！

「うおお！なにしゃがるムツッリーニ！」

「……………うらやましい」

血涙を流しながら言わないでよ、康太くん…

「落ち着いてムツッリーニ！」

「そうですよ、土屋くん！」

明久と瑞希が康太くんに抱きつきましたって…
瑞希！あなたが抱きつくと！

「！……………（ブシャヤヤヤヤ！）」

「わあ！ムツッリーニ！」

「しっかりしてください！土屋くん！」

「……………か、感無量^{バタッ}」

「ムツッリーニ！……………（号泣）」

「土屋くん！……………（号泣）」

「……………なんだあのコントは？」

《さあ、私にも分かりません……》

とりあえず、逝きかけた康太くんを戻して作戦会議をしてお昼は終わりました。

第七話（後書き）

次回からはBクラス戦です。

第八話（前書き）

怪現象がおきます。

ご注意ください。

第八話

いよいよBクラス戦が始まりました。

私は毎度の事ながら教室でお留守番です……

お昼休みの時、また明久を宣戦布告の使者にしようとした雄二くん。私達の説得（前回みたいないなことができました）により、今度は横溝くんが逝ってくれました。

え？前回も今回も漢字が違う？

気にしたら負けですよ

『失礼する。Fクラスの代表はいるか？』

いきなり誰が入って来ましたよ？

「代表は俺がなんだ？」

『Fクラスと停戦協定を結びたいから一緒に着いてきてくれ』

「……………待ち伏せじゃないよな？」

「大丈夫だ。だから、こうして先生を証人として連れてきた。」

「……………分かった。着いていこう、他のヤツも来てくれ」

雄二くんは教室にいた人達と行ってしまいました。

あれ？また、置いてかれた？

……………寂しいな、orz

仕方ありません。大人しく待つことにしますか。

ガラッ

？随分、早いですね。
もう、終わったんでしょうか？

『おい、大丈夫なんだろうな？』

『あいつの作戦だ。大丈夫じゃないか？』

『まあ、失敗しても。あいつの所為にすればいいだろ？』

『そうだな』

誰なんでしょうか？

Fクラスの生徒じゃありませんね

『とにかく、とつととやるぞ！』

そういうとその人は手近にあった卓袱台を壊しましたって…

《いきなり、なにするの！？》

『おわ！なんだこれ？』

『気にせずさっさとやろうぜ！』

さらに卓袱台や勉強道具を壊していきます。

《やめて！》

『これ結構楽しいな!』

《やめ……》

『ああ、やめねえな!』

《………》

『『『『ハハハッ!』』』』

《………止めてって言うてるでしょう?》

『『『『!?!?』』』』

………もう許さないんだから

〔No side〕

最初に男子生徒達が気付いたのは温度だった。

春先とはいえ、連日晴れ間が続いたため比較的に暖かい温度であった。

当然、Fクラスですきま風が吹くとはいえ、さっきまでは暖かい温度だった。

そう、さっきまでは…

『おい、なんか寒くないか?』

『ああ、確かに』

『みる、息まで白いぞ』

だんだんと温度が下がり、男子生徒達は震え始めた。

カタカタツ

『『『『？』』』』

ガタガタツ！

『『『『！？』』』』

音が鳴り始め、男子生徒達は振り返り、驚愕の顔をした。

そこには…

今まで自分達が壊した卓袱台や教科書、筆記用具などが浮かんでいた。

《………言つたよね》

ふと声が聞こえた。

慌てて声がした方を向くと…

さっきまでいたウサギのぬいぐるみが浮きながら男子生徒達を睨みつけた。

『な、なんなんだよアレ!』

『知るわけないだろ!』

《私は壊さないでって言ったよね?》

『気にするな!こんなのただの見せかけ』

ヒュッ

ドスッダスッ!

『ひっ!』

男子生徒達のひとりが落ち着かせようとしたが、

その足下に卓袱台の木片やペンなどが突き刺さった。

《私は言ったよね?やめてって?》

『コクコク』

男子生徒達は震えながら、壊れた人形のように首を縦に振り続けた。

《もし、今度やったら...》

『ガタガタッ』

《殺すよ?》

『『『!!?!?』』』

バタバタッ

そのまま男子生徒は気絶してしまった。

のちに男子生徒達は語る…

Fクラスには幽霊がいます…

〔No side out〕

第八話（後書き）

これが世にいうポルターガイストか！

よく、分かりませんが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3171z/>

バカとテストと召喚獣～僕の家族は幽霊！？～

2011年12月21日13時54分発行